中国

私の中国引揚記

東京都　野間　恒

はじめに

昭和二十一（一九四六）年四月に中国から引き揚げてきたが、それに至る経緯を語るには、七十の坂を越えた今なお、私の胸うちにほろ苦い記憶となっている我が家のプライバシーに触れねばならない。父は、愛媛県の島嶼部に住む二反百姓の長男として生まれた。授業料の要らぬ師範学校から、東京高等師範学校（予科）を特待生で終えて、愛媛県の西条中学で教鞭をとっていた。「産めよ、殖やせよ」の風潮の中で生まれた弟妹七人への学費仕送りを続けていた。

弟妹が自立したのちのある年、我が家に大事件が起こった。それは私が生まれたころで、祖父が貯金をためてかなり大きな家を新築した。どういう事情か知らないが、その時期に祖父は祖母の実家から頼まれて借金の連帯保証をしていたらしい。ところが保証責任を履行せねばならぬ羽目になり、家の新築費用にあたる部分の借金が我が家に残ってしまった。この借金返済の重荷を、長男である父が背負うことになる。

西条尋常小学校に奉職していた母と結婚した父は、生活費を母の給与で賄い、西条中学校に奉職

する自分の月給はすべて借金返済に充てていた。しかし債務の大きさゆえに、この方法ではなかなか借金が減らない。思い挙句に行きついた方策が、内地よりも高収入が期待できる「外地勤務」であった。こうして、父は中国山東省の省都・済南へ単身赴任することになる。

今治港から「利根川丸」という五百トンの客船で門司に渡り、そこから外航船で青島に渡航するものだった。昭和十四年春、今治港桟橋を離れる船の後甲板に毅然と立ち尽くす父の姿、大勢の見送り人の中、ハンカチで眼をおさえて一人うずくまる母の姿……。この情景は今でも鮮明に覚えている。

こうして両親の別居生活三年経った昭和十七年、母と私は済南の父へ合流するために旅立つことになる。今治から門司まで内航客船、門司から中国の青島まで東亜海運の客船で渡航するものだ。父は、三年前に「ばいかる丸」という五千トンの客船で渡航したが、航海中に船長と囲碁友達となり、ずっと船長室で烏鷺を戦わせていたという。そういうこともあり、「船長によく頼んでおいたから、渡航するときは『ばいかる丸』で来るように」と父からの手紙にあったらしい。後で分かったことだが、乗組員は一定期間で交代するから、父が親しくなった船長の船に乗ることのできる保証はなかった。因みに「ばいかる丸」は昭和十六年十二月、陸軍病院船に徴用されていたから、船自体がこの航路に入らなかったわけである。

一　日本から中国へ

昭和十七年三月、私たちは「利根川丸」の姉妹船「大井川丸」で門司に渡り、そこで青島への便船を待った。このとき母は、「ばいかる丸に乗せてください」と、船会社の門司支店の窓口でしきりに頼んでいた。私たちを乗せてくれたのは、「泰山丸」という五千トンの船で、私たちは母と同年輩の婦人が同室する二等船室の三人部屋だった。イギリスから購入した船齢四十年の船は、灰色一色の戦時塗装だった。この老客船に対して早春の黄

海は優しくなく、船に弱い婦人たちを苦しめていた。船室を出た所にある食堂に座る人影がほとんど見えなかった。平時なら、門司から青島までは二日もあれば行ける距離である。それがこの航海では三〜四日かかったように記憶している。これは最近分かったことだが、船は敵潜水艦からの危険を避けるため最短距離をとらず、朝鮮半島の西岸沿いに北上して渤海湾の入口で南下するという迂回ルートをとっていたのである。

玄界灘の荒海にもまれながらの航海四日間、船は青島に安着した。下船してふと岸壁を振り返ると、泰山丸は「やれやれ無事に着いた」と言わんばかりに、海水で濡れた船体を休めていた。これが泰山丸との見納めとなった。というのは、この船は次航海のとき朝鮮半島沖で座礁、沈没してしまったからだ。

青島に上陸した私たちの眼前には、ドイツ租界時代の名残りのある白い壁と青い屋根の、ハイカラな街並みがあった。医院を開業していた父の友人が、出迎えに来てくれていた。国民学校四年になろうとする私には、人力車に同席した自分と同い年くらいのお嬢さんが、別世界の少女のようにまぶしかった。

青島から済南までは、華北交通の膠済幹線が一日五列車走っていた。当時の時刻表を見てみると、私たちが乗ったのは午前八時十五分発、終点の済南に午後六時五分に着く列車であることが分かった。九時間半の道中の模様は記憶にないが、暮れなずむ済南駅に着く。迎えに来た父の嬉しそうな表情を見て、ホッとした。母の喜びはさぞかし大きかったことだろう。

二　済南での生活

済南日本高等女学校が父の職場で、教頭を奉職していた。私は、済南第三日本国民学校の四年に編入された。済南には天津や上海のような租界はないので、中国人と同じ区域に住んだが、十戸ほどの邦人住宅を囲む袋小路の中に自宅を構えた。父は、祖父の所に借金返済の仕送りを続けていた。

私たちが住む中国の地域は日本軍が点と線で制圧していたから、市内にいる限り生活の安全は保証されていた。思い出したように中国奥地から一機か二機で飛来するP-51の機銃掃射がある程度で、ごく安穏な日々だった。市外に遠足に行くときは日本の兵隊が護衛してくれたが、危険ということでほとんど遠出はしなかった。というのは、「市街地から離れると匪賊に襲われる」と言われていたし、中には、匪賊に捕まった邦人が二頭の馬で股を裂かれたとか、陰茎を切断されて口にくわえさせられた、というおぞましいうわさも流れていたからだった。

私自身は、国民学校になんということもなく通学する毎日だった。後で分かったことだが、私たちの生活は、精神的にも物質的にも内地に住む人たちとは比べ物にならぬほど恵まれていた。父のほうは学校のコートでテニスをしたり、修学旅行に女学生を引率して蘇州や北京に行ったり、日曜日には街外れに在って清水がこんこんと湧き出る太明湖に家族を連れて行ったり、古物市を漁ったり、今にして思えばこのころが父にとって人生最良の時期であったと思われる。

済南には陸軍航空隊の基地があった。何かの経緯で航空兵の方々と知り合いになる。休日には、我が家に招いて家庭料理をふるまっていた。昭和十八年には借金返済も終わり、「生活は以前よりも楽になり楽しかった」と母が洩らしていた。

大東亜戦争の戦局が進むにつれ、戦時色の深まりが窺われるようになった。予科練に入った国民学校の上級生が、賜暇帰省したことがある。「尽忠報国」を説く七つボタンの真っ白な制服に憧れた。

昭和十九年秋のある日のことである。父が息せき切って学校から帰ると「おい、関がやったぞ」と声を絞り出すように私たちに言った。何のことか分からないのでポカンとしていると、関行男大尉に率いられた神風特別攻撃隊・敷島隊が敵艦に体当たりした、というものだ。西条中学で教鞭をとっていたころ関生徒に国語、漢文を教えていた。

それで、外地勤務の父にも現地の邦字紙から取材を受けたとのこと。翌日の紙面には「関君は、分からぬことがあれば職員室まで聞きに来る、熱心な生徒だった」という談話が載っていた。

今は「戦法の外道と論ぜられている」この自爆攻撃は、内外にセンセーションを巻き起こしたものだが、特攻生みの親とされている大西瀧次郎中将が、敷島隊に向けたはなむけの言葉「諸氏はすでに神である」の裏で、「俺みたいなヤツを死なせるんだから、海軍も馬鹿ですよ。だから俺は、そんな馬鹿な海軍のためには往かない。あとに残されるK・A（海軍隠語で妻のこと）のためです。K・Aがヤンキーなんぞに犯されたらたまりませんからね」「アフター（同じく未亡人のこと）になるK・Aのために往く」（「敷島隊・死への五日間」根本順善著から）と宣言して出撃して行った郷土の先輩を、今なお誇りに思っている。

中学に入学した昭和二十年になると戦局がいよいよ緊迫し、特攻隊の活動が外地の私たちにも逐一報道されるようになる。特攻でお国のために戦いたい、というのが少年たちの当たり前の心情となる。もちろん、この作戦がどれほどの効果があり、またおぞましいものであったかは知る由もなかった。内地にいる祖父への手紙に「早く特攻機に乗って敵艦に体当たりしたい」と書いたところ、祖父からの返書に「お前が特攻機で体当たりすれば、それでおしまいだ。そうではなく、多くの飛行機を作る技術者となるのが国のためになる」と諭されて、なるほどと思ったことがある。

三　敗戦そして陸行一カ月

昭和二十年八月十五日は、日本人の大多数が天地動転の思いで迎えた日である。外地の在留邦人もそれ同様、あるいはそれ以上に激しい座標軸の転換を味わった。済南日本中学校一年で敗戦を迎えたが、この日を境にしてすべてが倒置した。伏目づかいに身を屈めていた中国人に代わり、今度は邦人がそうする番になる。驚いたことがある。父の学校の小使いさんで、笑顔を絶やさぬ二十代

の中国人好青年がいた。私の家にも用足しに来ており「東（トン）さん」と呼んで親しくしていた。その「トンさん」が、八月十六日になると国府軍将校の制服に身を固めて現れたのだ。日頃の笑顔は消えて、キリッとした表情だった。父の同僚教員だったろうか、虎の威をかる狐よろしく、某中国人との知り合い関係を笠に着て、傍若無人の振る舞いをする日本人も現れた。誰も後難を恐れて敬遠したままである。このとき、その男に「君も日本人だろう……。」と諄々（じゅんじゅん）と諭していた父の姿が、今でも瞼に焼きついている。

　済南には、軍民合わせて八万人が居住していた。昭和二十一年四月済南から引き揚げた安藤達夫氏の手記（毎日新聞社刊「一億人の昭和史」）によると、済南の陸軍司令部の鈴木参謀が細川軍司令官と寒川参謀長に、「軍の任務は、当地の日本軍民を安全に帰国させることにある。そのためには軍が保有する金の全部を活用すべき」と意見具申した。これに対して軍司令官、参謀長も反対したが、「刀にかけても」と強く迫って方針を遂行することとした、とある。安藤氏の手記は続く。済南～青島四〇〇キロメートルの間、二〇キロメートルごとに引揚梯団の中継基地を設け、それに「引揚日僑奉仕隊」を配置して宿泊、食糧手配などの便宜を図ったほか、必要に応じて陸軍機から中継基地に金幣を投下して、中国人による略奪を最小限におさえた、とある。

　引揚者の第一梯団が出発したのは昭和二十年十二月と記録されているが、私たちの出発は年を越した。落ち着かぬうちに昭和二十一年を迎え、帰国の日が近づく。家の中はそのままにして、凍てつくような三月の某夜、携行を許された行李一個を持って家を出る。富東里という十戸の邦人家屋のある袋小路を出たのだが、部屋に香を焚いて家を出た邦人もあった。済南駅には貨物列車の黒々とした影が引揚者たちを待っていた。どのようにして乗ったのか記憶はないが、有蓋貨車に立錐の余地もないほど詰め込まれたのを覚えている。の

ろのろと一日走り、張店という駅に着いたのが三月七日だったから、私の誕生日が来るたびにこの駅名を思い出す。

済南から青島までの路線は、国府軍と八路軍がまだら模様で支配していたので、途中でいろいろなことがある。列車が突然止まる、外で聞こえる人声にだれもが息をひそめる。母親は、赤ん坊を泣かさぬようにかき抱く。「時計何個、ベルト何本を出せば通過させる、と言っているから皆さん協力してください」と通訳の声。他の貨車では、屋根の通気孔から手榴弾が吊るされて金品を強要されたと後から聞いたが、私の貨車ではそのようなあくどさでなく、やんわりと強要されるに留まっていた。梯団という五〇〇人単位の引揚行で、団長の立場にあった父は、愛用の懐中時計やベルトを真っ先に供出して、人々に協力を依頼していた。こうした「通過儀礼」が幾度もあったので、ほとんどの男性は最後にはベルト替わりに荒縄を腰に巻くという、惨めな風体となった。

線路が寸断されていたから、徒歩やトラック輸送のほか、荷車（馬車か牛車）では老人や婦女子を乗せて男子が歩く。中国人の群れが、恨みのこもった目つきで両側について来る。手鉤のついたロープを振り回す者もいる。折りあらば、荷物を奪おうというものだ。引揚者たちは、厳しい顔つきで整然と隊列を組んで歩いた。母は三歳の弟を背負って荷車に乗り、私は大人に交じって歩いた。このとき父は四十四歳だったが、大人たちの緊張のほどは大変なものだったことが、成人になって理解できた。

無蓋貨車でも輸送された。貨車内での「用足し」がどのような方法でなされたのか忘れてしまったが、婦女子には大問題だったはずだ。この無蓋車には、監視役の八路軍兵士が一人ずつ乗っていた。輸送中の私語は一切禁じられていた。誰かが喋ったのを見付けた兵士が、突然自動小銃を上に向けてダダーンと数発発射したのには驚いた。

四年前、母に連れられて渡航したとき、汽車で

青島〜済南九時間半の行程が、引揚行では丸一カ月かかる。済南からの携行行李は道中で盗られてしまっていたから、青島にたどり着いたときは着の身着のままだった。（その点、青島、天津、大連など臨海地からの引揚者は恵まれていたはずだ。）白い壁がポプラ並木にマッチした青島の街は明るく、埃まみれの引揚者にはこよなく新鮮に映った。明るい青島の街頭で腹立たしい光景が目に飛び込んできた。貨車輸送の途中、中国兵士から通過許可と引き換えに金品が強要されたことは前に触れた。その時には顔を伏せて供出しなかった人たちが、安全な土地に来るや、これ見よがしに時計やベルトを身につけて歩く風景だった。人生で初めて味わった不条理である。

四　かえり船

青島では一カ月止められる。便船やりくりの都合でそうなったらしい。この間に支給された食べものは、高粱という中国玉蜀黍。母は、弟に生煮えのこの食材を噛み砕いて食べさせていたが、消化不良と栄養不良が重なって、弟の衰弱は進んでいた。渡航のときに世話になった父の友人の開業医のお陰で、命はなんとかとり止めていた。

ようやく便船が着いたという知らせで、引揚者たちは港頭に向かう。岸壁には、異様な船が三隻並んでいた。スマートさとはほど遠い太っちょの船体、船首には観音開きのドアがある。これが、大戦中にアメリカが戦車輸送と上陸作戦用に大量建造したＬＳＴだということは後から知った。

ＬＳＴは二千重量トン、航海速力七ノット、イギリスで開発されたが、船首扉と海浜乗りあげに適した浅喫水船型をもとに、米海軍が大戦末期に建造を始めて千五十二隻も量産され、硫黄島や沖縄上陸作戦に使われた。ちなみに、邦人引揚げでは、昭和二十四年末までに六百万人もの軍民が引き揚げている。この輸送には、アメリカから百九十二隻が貸与され、ＬＳＴもその一役を買っていた。旧日本海軍艦艇百七十二隻、船舶運営会管理船舶五十六隻も使用されていた。

船首のランプウェーを通って乗船する。ホールドの中は、今のカーフェリー車両甲板そのもので、戦車搭載用の鋼板デッキにアンペラ（中国玉蜀黍の表皮を編み合せて作った敷物）を敷き、引揚者たちは身を縮めるようにして腰をおろす。全長九十四メートルの船に千人もが詰め込まれた様子は、十九世紀の移民船にあるスティアレジもかくや、と思わせる光景だった。

昭和二十一年四月、引揚者を腹いっぱいに詰めこんだＬＳＴ三隻は青島を後にする。一～二マイル間隔の単縦陣で東に進む。春は名のみ、低く覆いかぶさる雲で黄海は鈍い灰色に光っていた。陸行一カ月と滞留一カ月の挙げ句、ようやく故国に向かう引揚者を乗せたＬＳＴ船団に海は優しくなかった。四年前の航海のときと同じく、季節風が海面を這うように走り、次々に押し寄せるうねりが船を緩慢にもてあそぶ。そのたびに喫水の浅いＬＳＴは前後左右に翻弄される。ドーン、ドーンと船底をたたく波の音が、雑魚寝する引揚者の体中に響いた。

日が経つうち、嘔吐物や幼児の排泄物で、すえたような匂いが船内に充満する。老人や船酔いの者は、横臥してひたすら眼を閉じている。急傾斜の仮設階段を昇れば露天甲板。このオープン・デッキには、舷側から張り出して木造のトイレが仮設されており、老人も子供も一日に何回となくこの階段を昇降していた。このトイレにしゃがむと、真下には航跡がザァーッと音をたてて流れていた。

長途の陸行は、老人や幼児には耐え難かった。疲労と栄養不良で力尽きる人が次々にでる。昨日までかたわらに寝ていた老人や幼児が、いつの間にかいなくなる。そして上甲板で水葬がある。形ばかりの祭壇が船べりに置かれ、人々が見守る中、毛布にくるんだ遺体が滑り板からサアーッと暗い海中に滑りこむ。ＬＳＴは長声一笛を悲しげに吹鳴、辺りをひと回りする。子供を死なせた親、親を喪った子、連れ合いを送る夫や妻。人々が立ち去ったあとも、海面を見つめて動こうとしない遺

族の姿――海は荒れなんとし、寒風だけがヒュー、ヒューと悲しげなソナタを奏でていた。同行のＬＳＴは波の彼方に見え隠れしていた。

戦後間もないころ、「かえり船」という演歌があった。船乗り姿の田端義夫がギターを抱えて歌っていた。「波の背の背に揺られて揺れて、月の潮路をかえり船……」というものだ。軽快なメロディーが歌詞のもつ深刻さを薄めているが、私はこの歌を耳にするたびに当時の暗然とした雰囲気を思い出す。この時のＬＳＴはまさにこの「かえり船」だった。

栄養不良で衰弱が進んでいた弟の様子がおかしくなったのは、このころである。突然の引きつけ発作が幼児を襲う。母親は、形相一変した我が子の口に割り箸をかませるのが精いっぱいだった。突如、そのとき父は立ち上がり、周りの人々に「だれかヤイト（お灸のもぐさ）を持っておられませんか！」と大声で尋ねまわる。運良く分けてくれる人があり、弟の腹にお灸を据えると発作がおさまる。日頃から、依頼心を持つことを潔しとせぬイメージを家族に植えつけてきた父だったから、一瞬その姿は異様に映った。私はいたたまれなくなり、上甲板に出て弟の無事を祈った。

航海が更に進んでからのこと。隣で起居していた引揚者が、戦闘帽を余分に所持していた。これを見た父が、言いにくそうに「息子の登校用に譲ってほしい」と頼んでいた。その人は「どっち道、どっち道」とか言いながら、まわりくどい口調で断っていた。内地の学校に転校する息子を思う余りの親心から出た依頼だったが、このときの相手の顔と、父が無理に浮かべた笑みが瞼に焼きついている。

千人の一喜一憂を乗せた航海四日間、ついに故国の姿が見えた。人々は我先にデッキに駆け上がる。土色一色の地に住んできた所為か、五島列島の島山の緑が目にしみた。佐世保湾の鮮やかな緑とは対照的に、灰色の未完成空母や小型艦艇が係留されていた。ＬＳＴに横付けされた艀は、エン

ジン音を響かせて陸に向かう。ふり返ると、「やれやれ大仕事だった」と言わんばかりのＬＳＴが人垣の間から見えた。

ＤＤＴの洗礼を頭から受けて母国に降り立つ。これで故郷に帰れるとだれもが思ったが、列車繰りの関係だろう、一週間の集団生活が待っていた。針尾海兵団の兵舎での起居、自炊が始まる。針尾の宿舎だった場所は、今ハウステンボスの敷地になっている。ときは新緑の五月、父はどこから求めてきたのか、サヨリを数匹、七輪に乗せた。まぶしいほど銀色に輝く細身の姿から立ちのぼる香りが、家族四人を包んだ。弟は、危機を脱したかのようにコンコンと眠っていた。どこからか、「リンゴの唄」が明るく流れてきた。今でも新緑の時期に店頭に並ぶサヨリを見ると、このときの光景が記憶の底からよみがえる。

五　帰郷とその後

いよいよ帰郷できる日が到来する。引揚者たちは、宿舎から南風崎駅まで徒歩三十分くらいだったろうか、列を作って歩く。日本の汽車もすし詰めだったが、中国陸行中の緊張感から解放された喜びが、だれの顔にも現れていた。佐世保線、鹿児島本線から山陽本線に出て尾道で下車、海上二時間ののち祖父の住む大島の実家にたどり着いたころは、夕闇が迫っていた。親子四人、裸一貫の帰郷だった。これから戦後の苦労が始まろうとしていた。

私は、大島から四キロメートル海を隔てた今治市にある今治中学（旧制）一年に編入された、市内の下宿から通学することになる。島では祖父が田畑を守ってくれていたので、毎日の食材には困らなかったようだが、私の学費などを稼ぐために、父は「武家の商法」を始めた。それは大阪で運動具などを仕入れ、島嶼部（とうしょぶ）の小学校に売りさばくものだった。週末に帰省してみると、家の戸棚に売れ残りと思われる卓球のラケットやボールのほか、竹製の歯ブラシなどが詰められていた。

父は定期的に大阪へ仕入れに行っていたが、そ

のときの身なりは、引揚時に着用していた緑地の服のままだった。すし詰め列車のデッキに掴まりながら乗ったこと、列車の揺れで危うくデッキから振り落とされそうになったこと、冬季に乗った関西汽船の大阪行きへの便船が満員で船室に入ることができず、ボートデッキで寒風に身を縮めながら一夜を明かしたことなどを、母と私に語っていた。これらの思い出は、今の私には心がよじれるほどの疼痛を感じさせるものだが、十三、四歳の少年の感受性では充分に受容できなかったことに、痛惜の念をいだいている。

家が農業といっても、今治生活の私は都会の人と同じくひもじい思いの毎日だった。月一回程度だったか、帰省先から一斗入りの米袋を担いで行ったものだが、それが下宿に着くとお粥に化けていた。下宿の主人は、米の一部を売って生計の足しにしていたと思ったが、都会のことだから致し方ないと考えた。それでも、芋づるだけで作った乾パンを学校のプールそばで食べたときの、不味い味と情けない気分の記憶は未だに残っている。

昭和十八年生まれの弟は引揚時の無理が尾をひき、医者から「栄養不良の要注意児」の烙印を押されていた。母は慣れない農作業をするかたわら、命を奇跡的に取りとめた幼児の看護に没頭していた。が、ある日、この幼児にまたも危機がやってくる。このとき今治にいた叔父の野間七郎が、「子供に精をつけるのは鯉の生き血が効く」と言って、どこから求めたのか大きな鯉を持って来てくれた。このお蔭で病状が持ち直した。

そのうち、私自身も生命の危機に逢着（ほうちゃく）する。昭和二十一年秋、今治から大島までの便船がお客を過積みしたまま出航、来島海峡にさしかかったとき、潮流に足をとられて覆没した。これに乗っていた私は海中に投げ出されて二時間ほど漂流した挙げ句、幸運にも救助されたものだ。電話もテレビもない当時だから、両親は事故をすぐに知る由もない。真っ暗になった山道を歩いて帰宅したとき、父が見せた驚きと安どの表情も忘れない。

事故を逸早く聞きつけた今治の叔父は、翌日我が家に飛んで来てくれた。そして遭難の恐怖がようやくよみがえっておののく私に向かい、「お前を今治へ連れて帰るが、もしまた遭難することがあったら、わしがお前を連れて泳いでやる」と言ってくれた言葉は嬉しかった。因みにこの叔父は、大阪商船の社員で大東亜戦争中にも乗船勤務しており、アメリカ潜水艦や艦載機の襲撃で三度も遭難、太平洋を泳いで生きのびたベテラン事務長だった。

その後、父は大島に開設された新制中学の校長を拝命する。以後「今の子供には道徳教育が必要だ」として訓育に専念するかたわら、週末には田畑へ出ていた。ようやく畑仕事に慣れた母は、下肥かつぎにも精を出していた。私のほうは高校卒業後、ようやく東京の大学に進学する。それからは、長男と次男の学費仕送りの苦労が両親の肩にかかり、これは私が就職する昭和三十二年まで続く。

私が進学した大学は自由闊達な校風で、クラブ活動では富士五湖で合宿するとか、休みには旅行に行く学友もいた。苦労して学費を送ってくれている親もとの深刻さをつい忘れて、小遣いを増やしてもらいたいと頼んだことがある。そのとき、父からの手紙には「無理すればお前の言い分を聞くことができないことはない。が、人間特に学生は、使える金が余分にあればお金の有り難さを忘れてしまう。反面、使える金が少な過ぎれば心が卑屈になる。私がお前に送っているのは、何れにも偏しない金額にしている」とあった。

「今にして思えば」という陳腐な接頭辞を繰り返すのもはばかられるが、父・野間太郎は苦労するために生を享けたのだろうか、と思うことがある。むろん、他にもこれ以上の辛苦をなめてきた人びとは数多(あまた)あろう。しかし、私の比較的に恵まれた人生、そして今の境遇と対比して父のそれは、弟妹七人の学費の面倒を見、祖父の借金の返済に半生をかけ、引揚げでの辛苦、長男の遭難事件、

次男の病弱と、人生のどこに良いことがあったのだろうか、と思うことがある。

昭和二十八年春、大学入学を控えて帰省したとき、父は密かに鏡に向かい、私がかぶる予定の丸い学帽を自分がかぶってニッコリしていたのに気付いた。「これで孝行の万分の一ができた」と嬉しかった。